

## 緑爽会会報 No. 180

2022年6月27日発行  
日本山岳会 緑爽会  
発行人 荒井正人



デザイン・制作 関塚貞亨

〜〜 《報告》 〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

### 春の山野草を楽しんだ八重山～能岳

今年2回目の会山行では、上野原の北にある里山、八重山から能岳を歩いた。八重山は昭和の初め、所有者の水越八重さんがまちと上野原小学校に寄付したことがその名前の由来。「みる」「きく」「かぐ」などの五感をテーマにした複数の登山路が小学校の子供らにより整備されている。

実施日：5月17日（火） 参加者：7名、下記写真参照

実施日の前週後半から雨模様の天気が続き、実施できるかどうか気をもんでいたが、前日の昼の予報ではどうやら持ちそうだということがわかり、催行することにした。

計画では9時41分発のバスに乗る予定であったが、順調に集合できたことにより1本前の9時13分のバスに乗って大堀で降りた。歩程が3時間ほどなので、普通に歩くと昼には下山してしまうかもしれないとちょっと心配しながら北西へ続く緩やかに上る舗装道を歩き始めた。途中、気にならないくらいの小雨が降り出した。20分弱で登山口である上野原中学校向かいにある駐車場に着いた。小雨も一応止んだ。

昨日降った雨で濡れた登山道から立ち上る土の匂いと新緑の香りに包まれて歩き出す。私だけでなく皆さん、心がうきうきしているのがわかる。歩き始めから小学生が立てた植物の名を記した小さな標示板がこここに目に入る。

春の山野草が白、黄、うす紫などの花を咲かせていて、その都度、植物に詳しい



八重山展望台 左から（前列）横関邦子、富澤克禮、辻橋明子、小林敏博、荒井正人（後列）石塚嘉一、鳥橋祥子

富澤さんの解説に皆が耳を傾ける。

じきにサイハイランの群落があるとの標示板を見つけて右を流れる沢まで下りる。畳一畳分くらいの広さにまだつぼみの段階だがサイハイランの群落があった。登山道まで戻って先に進むと、今度はエビネの群落があるとの標示があり、やはり道はずれて右に少し登ると、エビネの群落が満開に咲いていた。

やがて、道標が現れて左の「視覚の森コース」を進む。東斜面を緩やかに登る道は樹木がまばらになる。マルバウツギやコゴメウツギが満開の花を付けていた。ハン

ショウヅルも見られた。富澤講師のおかげでメモ帳には20を超える植物の名が並んだ。

新緑の葉を打つ雨の音が聞こえた。傘が必要なくらいの雨がまた降り出した。ひと登りした八重山頂への直登と展望台経由の分岐の小平地で樹林が頭の上を被っているので水分補給する。

富澤さんによると、「こぼじい」という人が八重山のブログを立ち上げていると教えてくれた。展望台まではあとひと登りである。展望台までの丸太の階段を登りきる辺りに白い髭を蓄えた仙人のような年配者が立っていた。後で富澤さんからうかがうと、その人が「こぼじい」だという。



ハンショウヅル

てから下山することにする。

緩やかな道を少し下ると、標高差で30~40mの急坂の下りとなる。今までいろいろな話をしながら歩いてきたが、滑りやすいジグザグに付けられた道を黙ったまま慎重に下る。下り終えた地点からは緩やかな歩きやすい道が続く。八重山山頂まではさまざまな山野草の花々に足を止めて時間がかかったが、八重山山頂からの登山道にはなぜかほとんど花は見当たらなかった。そのせいか、桑原峠で小休止したものの、ほぼ予定どおりに新井への舗装道に着いた。新井バス停に着いたが、バスが来る時間までかなりあり、急用でタクシーで帰宅する辻橋さんを見送った後、残った6人で上野原の町並みを眺めながら上野原駅まで歩く。 (報告：小林敏博、写真提供：石塚嘉一)

《行程記録》上野原駅南口バス 9:13⇒9:25 大堀バス停→9:40 上野原中学校前駐車場 (八重山登山口) 9:50→11:00 八重山山頂直登路・展望台分岐 11:10→11:25 展望台 (昼食) 12:00→12:20 八重山山頂 12:25→12:40 能岳 12:50→12:55 虎丸山分岐→13:25 桑原峠 13:40→13:55 車道出合→14:30 新井バス停→15:30 上野原駅



キンラン



## 5月山行「八重山～能岳」に参加して

辻橋 明子

昔、同好会の山遊会で行った記憶があり、古い山行記録を開いてみた。平成26年4月末。記録では上野原からバスで新井へ。山風呂の住宅街からの登山道が見つけれず人に聞いたりしているので、現在の様な標示板はなかったのだろう。虎丸山経由で能岳～八重山と歩き、まだ東屋のない展望台から駐車場に下り、秋葉山～根本山を経て上野原にもどっている。桜は終わっていたが、当時もお花の種類は多くあったようだ。慌ただしい山行だったのか、思い出に残るお気に入りの山にはなっていなかった。

今回、大堀からの入山で新緑の気持ち良い登山道を進み、まもなく右手に、サイハイランの群生地を案内する標示板が立っていて、少し道を入ったところに、まもなく開きそうな気配のサイハイランの群落があり、その数の多さに驚いた。道すがら、さまざまな草木や花、小生物(鳥、カエルなど)の案内、紹介の標示板があちらこちらに立っていて、それを見ながら歩くのも楽しかった。ギンラン、エビネ、キンラン、タツナミソウ、ナルコユリ、満開の丸葉ウツギ、コゴメウツギ、、次々と現れる花達にみとれ、道草を食う時間が沢山あり、のんびり、ゆったりと自然を五感で味わいながら歩くことが出来た。最後の階段を登って、展望台の東屋に着いて、道志山塊、丹沢の山々を見回し(富士山は雲の中だったが)、こんな良い山だったんだ～と、八重山を私のお気に入りの山へ加えることが出来た、楽しい山行になりました。

### <速報>さがみこベリーガーデン見学とBBQ

実施日：6月21日(火)

参加者：16名(下記写真参照)

梅雨時であり天候が懸念されたが、曇りながら予定通り実施することができた。

会報177号で開園前に見学したことを報告しているが、今回は18日に開園した直後。ブルーベリーの実が鈴なりで、摘みながらの食べ放題は楽しい。詳細は次号でお知らせするが、ぜひ夏の間を訪ねていただきたいと思った。(荒井記)



左から(後列) 田村佐喜子、相良泰子、富澤克禮、田井具世、松本恒廣、小清水敏昌、渡邊貞信、  
横関邦子、栗城幸二、荒井正人、山川勇一朗社長  
(前列) 夏原寿一、鳥橋祥子、渡部温子、山川陽一、小林敏博、松川征夫



が餓死した。インパール作戦でもレイテ島でも日本軍の空からの補給を一度も受けたことがなかった。

### 海軍について

海上での戦艦を主とする最後の勝敗を決するのは戦艦である。主とする艦隊同志の決戦は砲術で決すると、砲術科出身の面々が固く信じている。一方航空部隊は着々と充実していたがトップが若く、古豪の砲術科に太刀打ち出来なかった。

ミドウェーの海戦では数隻の航空母艦を撃沈された。潮田氏が乗った瑞鶴のみが無傷であった。その後の空母は商船を改良したもので、一発の魚雷で沈没した。その後急いで建造された「大和」と「武蔵」は超巨艦であった。この戦艦一隻の建造費で 100 機搭載できる空母 3 隻も出来る費用であった。航空部隊の連中はどうして空母を造らないか口惜しがっていた。

戦争の敗因は陸軍も海軍も現場の戦争を無視した参謀の作戦が失敗であった。

### 戦後の活躍について

日映新社の社員となり、帝銀事件、松川事件などのニュース映画の報道で活躍

1958 年 チョゴリザ登山隊にカメラマンとして参加、活躍

1964 年 東京オリンピックの報道カメラマンとして活躍

1972 年 札幌オリンピックの報道カメラマンとして活躍

1970 年 日映新社退職

その後 15 年間専門学校多摩学園の映画学科（現在の多摩美術大学）で教鞭をとり、ドキュメンタリー映画の撮影、製作を指導した。

2021 年 9 月 21 日死去 享年 104 歳

私はチョゴリザ登山中に断片的に中国戦争、ミドウェー海戦、インパール作戦、ガダルカナル島、レイテ島戦線の話を知っていた。今回潮田氏の「私の戦争体験」を読んで、太平洋戦争の年代別戦線の歴史を知ることが出来た。



チョゴリザ隊のメンバー（芳賀氏撮影）

各戦線から逃れた度に潮田氏は、戦争のない平和な地球にしたいと叫んでいた。地球が一つになり、言葉が統一され、貨幣も統一される地球になってほしいと記され、戦後も戦争が世界各地で起きていることを嘆いていた。

潮田氏は誠に運の強い人であった。インパール作戦でも、レイテ島の戦線でも勇気をもって脱出したことは見事であり、称賛したい。心より喝采を送りたい。

日本人でこの太平洋戦争の各激戦地に従軍し、報道カメラマンとして生き抜いた人は潮田氏以外に実在したのだろうか。

太平洋戦争の日本敗戦の潮田氏が撮影した貴重な 5000 フィート余のフィルムと資料は空襲ですべてが焼失した。戦争の地獄を見た潮田三代治氏も亡くなった。戦争の記録が喪失したが、チョゴリザの映画「花嫁の峰 チョゴリザ」は後世に残ることだろう。

(2011 年 11 月記、写真も芳賀氏提供)

## 「今西錦司先生遭難？」

南川 金一

木曾の山について調べたいことがあったので、都立図書館へ行って『木祖村誌』を開いていたところ（註）、「今西錦司先生遭難？ やぶはら高原スキー場での出来事」と題するコラムが目に入った。町村史・誌というものは、とかく取り付きがたい印象を持たれるので、それを避けるために『木祖村誌』はコラム欄を設けて関係者に思い出を語らせている。「藪原スキー場と観光開発」の章で、スキー場のパトロール隊員の思い出を載せており、それが前記のコラムである。本紙 No178（2022年2月発行）に今西錦司の山登りの一端を書いたところであり、今西錦司遭難？とあれば、見過ごすわけにはいかない。3頁半の長い文章なので、かいつまんで内容を紹介しますと

.....

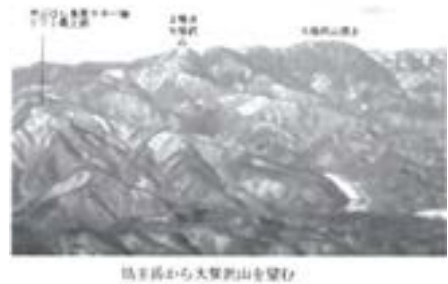


.....

このコラムには、著名な先生を事無く下山させることができた安堵感とともに、先生ご一行パーティーに当惑した様子が綴られている。パトロール隊では、著名人の万一の事態に備えての対処であり、一方の登山グループのほうは、途中で下山に踏み切り、下山に時間を要したが、自分たちの方から救助要請をしたわけではないし遭難騒ぎになったとは思っていないから、その場に関係のない話まで持ち出して響きを買っている。そこに温度差があったようである。地元になれば、無事に一

件落着すれば完了であり、めったに来ることのない有名人にまつわる伝説が残ることになる。コラムの筆者も、世話になったお礼として今西錦司がパトロール隊の日記の表紙裏に書いたサインを「木祖村の大自然や人とかかわりのあった、偉大な先生の記録として大切に保存したい」と結んでいる。『木祖村誌』が刊行された時には、今西錦司はもうこの世にはいないから、こんな形で伝説が残ったとは、知る由もない。それにしても、「有名」とは厄介なものである。

大笹沢山から南へと延びる尾根の東面に藪原スキー場があり、リフトで1,600 ㍍あたりまで上がることができる。リフト終点と大笹沢山との標高差は400 ㍍程度であり、春の締まった雪の上なら今西錦司の足でも可能であろうと周囲が勧め、今西錦司も2,000 級の雪山とあって遊志がわいたに違いない。『千五百山のしおり』を見ると、今西錦司は1等点と2等点のある山に執念を燃やしている。大笹沢山の頂上には三角点はないが、頂上の1.5 ㍍ほど手前に2等点「大笹沢」(2002 ㍍)がある。これにも食指が動いたのではないかと思う。しかし、今西錦司は締まりの悪い雪に足を取られて疲労困憊、退却を決断してからも予想以上に時間を要することになった。無雪期の山では杖代わりの棒を使っている。雪の山ではそんなものは役に立たないことは知っていただろうが、周囲はどのような心配りをしたのだろうか。それと、スタートが遅い。10時過ぎにリフト最上部からの出発では、雪の条件がよくても、明るいうちに大笹沢山頂上まで往復するのは厳しい。文章から推測すると、車を乗り合わせて、朝京都を出発して木曾へ来て、その日のうちに登って帰る計画だったようだ。私の足でも、スキー場最上部から大笹沢山頂上まで3時間10分かかっている。雪の条件はよく、まだ定年前の、毎週のように山へ行っていた元気な頃で、単独であり、途中ではほとんど休んでいない。足が止まるのは写真を撮る時だけだった。藪の斜面のトラバースがあり、クラストしている雪面であっても樹林帯では踏み抜くことがあるから、ワカンを着けっぱなしで歩いていた。30人ものパーティー全員が頂上に揃うには、雪の条件がよくても4~5時間はかかるだろう。私の場合は以前にも歩いていたので地理感があったが、初めて来て、尾根筋の様子も見通せないような天候条件とあっては、足は捗らない。コラムには、今西錦司のサインの写真が載っており1985.3.17の日付がある。今西錦司は83歳。大先生を喜ばせてやりたいとの動機からであろうが、83歳の老人には過酷だった。したがって、『千五百山のしおり』には大笹沢山も、その手前の点名「大笹沢」の名前もない。



大笹沢山は標高2,040 ㍍、木曾北部にある。東面に落ちる大笹沢の源頭の山なので大笹沢山と呼ばれている。笹が深いからそう呼ばれるようになったのではないかと思われるほどに、全山が深い笹に覆われているので残雪期以外は大変な目に遭う。私は3度目にして頂上に立つことができた。最初は無雪期だったので背丈が没するほどの深い笹と倒木に悩まされて退却した。2度目は今西パーティーと同じように残雪期にスキー場上部から向かったが、天候が悪化して吹雪となり、三角点ピークの少し手前で退却した。3度目は4月になり、スキー場はすでに閉鎖されていた。グレンデ下の民宿に泊まり、5時半に出発してグレンデを登った。詳しくは拙著『山頂渉猟』の大笹沢山の項に書いたので、興味のある方はご覧いただきたい。

(註) 都立図書館には全国の県史、市町村史・誌が集めてある。東京には全国から人が集まっているから、東京の図書館らしい配慮であり、それが都立図書館の特色の一つであると言える。私は山を調べるにあたり、まずはその山がある市町村の史・誌を調べてみることにしている。役に立つ場合もあれば、立たない場合もあるが、「犬も歩けば…」である。



## この6年間のこと

夏原 寿一

この6年間の富澤体制について、本紙前号の「近況報告」欄をはじめお手紙やメールで多くの方々から労いのお言葉を頂戴いたしました。ありがとうございました。大変うれしく思います。この間に携わってきたことのうち、幹事会と会報について記しました。

### ・幹事会

幹事会は、隔月の会報発送作業の後に行なっていました。議題は当然のことながら山行計画や講演会、暑気払い、忘年会、会費の納入状況などですが、私たちが小耳に挟んだ話や電話で受けた提案なども代表に伝え、検討事項としていました。

幹事会の1週間ほど前に、上記の事柄を纏めたメールが代表から議案として送られてきます。これは、幹事全員が同じ情報を知ることのできる大切なものでした。同様に、各行事の担当者から行事内容についてのたたき台もメールされてきました。

私たちは議案を読み、考えを整理したうえで会議に臨みます。会議には、ベストの答えを出すべく全員が同じ方向を向いて検討していく雰囲気があり、とかくありがちな自らの意見に固執するとか、場を掻き回すような動議の出ることなどはありませんでした。そこには自然に一体感が生まれ、自ずと「和」が生まれていました。

幹事会の数日後には、検討内容をまとめた摘録が代表から送られて来るので、それを踏まえて会の運営にあたっていました。

### ・会報

前号の「近況報告」に会報を楽しみにしているとの声が寄せられています。また、緑爽会以外にもある支部の元副支部長からは「緑爽会の会報は、『山』よりも資料価値がありますね」というお手紙を頂いたことがありますし、別の支部の元副支部長が「緑爽会の会報は面白いので毎号HPからプリントアウトして読んでいますよ」と言ってくださったこともありました。ありがたいことです。

会報の制作は先ず、寄せられた原稿から荒井さんが小林さんと共にゲラを作ることから始まります。ゲラができると幹事宛てに送られてくるので、幹事はそれをチェックし、必要に応じて手を加えて送り返します。こうして複数の目で見ることで、誤りのない会報を目指しています。

チェックの際には、変換ミスなどの明らかな誤りのみを修正し原文にはできるだけ手を加えないことを基本にしています。さらに固有名詞と数字には特に正確を期すのはもとより、漢字と平仮名の使い分け、例えば「下さい」と「ください」とか「事」と「こと」などにも気を配っています。

全員のチェックが済むと、荒井さんがパソコン上で印刷原稿を作って再び全員に送り確認をとってからプリントアウトしてルームに持参し、コピー機で印刷して封筒に入れ発送となります。

爺ヶ岳

鹿島槍ヶ岳

五竜岳

唐松岳(手前に八方尾根)

鍵ヶ岳

杓子岳

白馬岳





## 奥只見を訪ねた昭和43年初夏

小原 茂延

昨年の師走4日に開催された「緑爽会講演会」の横山厚夫さんと桜井昭吉さんによる講演のうち、後者の深田久弥一行を平ヶ岳に案内した講演は古い記憶をよみがえらせた。関連で未丈ヶ岳3度目にしての登頂経緯も高辻謙輔さんの書などの記憶もあった。

もう50数年も前、当時私は西武鉄道の西武秩父線建設工事に携わっていたが、奥只見銀山湖を渡った奥の大津岐(おおつまた)ダム配属だった故Y氏が、冬期間奥只見の作業が不可能なため応援に駆けつけてくれたことがあり、それはいわゆる社内における出稼ぎだったが、強力な助っ人であった。その兄貴分の彼が大津岐ダムを見学に来いと、当時の若手、私ら3人に声を掛けてくれたのであった。従って山行は伴わなかったが、奥只見を探訪できる絶好の機会であり、越後路の苗場、二居、越後湯沢、六日町の当時の佇まいも忘れ難く脳裏に焼き付けられており、今思い出しても懐かしい探訪であった。

奥武蔵吾野からマイカーで一路、小出町(当時)を目指す。三国峠を越え越後湯沢で駅前に立ち寄ったが、まだ未舗装で釘を拾ったかパンク、その日、夕方大湯温泉に宿泊し、翌朝早く電源開発の専用隧道を通して奥只見ダムサイトから荒沢岳などを眺めながら連絡の船で大津岐川に入り、自然に溶け込んだロックフィルダムの諸工事をY氏の案内で見学した。その日のうちに帰埼という忙しい日程であったが、奥只見の印象は強烈であった。

さて昨年の講演会当日、立ち寄った神保町で見つけたのが越後支部発刊の「越後山岳第6号」越後の国境調査報告書(昭和43年9月)で、深田、藤島敏男らの一行が未丈ヶ岳に登った時期の2年程前、奥只見ダム～三条ノ滝～尾瀬ヶ原(1)で、実施記録は「小出山の会」の桜井昭吉氏によるものであった。記録は調査記録と図面が付され、湖底となる前の銀山平がわかり60年ほど前の地形を明瞭に理解できた。

記録によれば、「昭和41年6月19日荒沢岳の息をのむような豪壮な山容である。好天に恵まれて定期船に乗り堰堤に着き、待ち時間の間に岡田正平翁の銅像の所に行くと、高波吾策会員と湯之谷村の関観光課長さん(当時)が見知らぬ人に説明をしていた」そうで、それが作家新田次郎との偶然の出会いで暫時同行したが取材だったかは不明。

本年に入って、未丈ヶ岳に登った深田一行らが下山した後に、大半の方は小出に向かったが、藤島敏男、深田久弥、近藤恒雄、村尾金二氏らは、伝之助小屋から片貝池に立ち寄っている写真に出会った。そのことを本年4月30日に桜井昭吉さんに電話でお尋ねしたところ、片貝池案内は別の人が同行したとの由でした。片貝池はかつて帝国

陸軍機が墜落した周辺にある池で水流も不明とか、写真で見ると限りやや不気味な感じがする程奥深い所だ。会津駒から富士見林道(といっても普通の登山道)を下る伸びやかな登山道の大津岐峠の地下深く檜枝岐トンネルが伊南川の水を只見川に導いていることを、今度の講演会で桜井さんに確認したが、土木技術者同士故で、ご存知だった事は言うまでもない。

## スプリングエフェメラルから初夏へ

—野山の自然の息吹に励まされて—

樋口 みな子

北海道は例年になく豪雪でしたが、雪解けと共に一気に咲いた野山の花や自然の息吹に感動しました。

4月22日、ビルの谷間にキタコブシが力強く咲きました。いつもは野幌森林公園で見ますが、この花が咲くと農家の仕事が始まります。

4月28日、宮島沼でシベリアに向かう7万羽のマガンがひと休みしていました。樺戸山塊の残雪が美しく、マガンも気持ちよさそうですね。この壮観な飛翔に私も心が躍りました。



同日、浦臼神社のカタクリとエゾエンゴサクの群生に心が洗われました。スプリングエフェメラル（春の妖精）と呼ばれる早春の花々です。カタクリは可憐な美しさとはかなさが、人を惹きつけます。今年も会えて嬉しかったです。

宮島沼で輝くように咲いていたエゾノリュウキンカ。花ことばは「必ず来る幸福」。たまたま入った湿地帯に咲いていて元気づけられました。



5月10日、江別市内で。緑色の花びらが美しい御衣黄桜（ぎょいこうざくら）が咲きました。花ことばは「永遠の愛」です。

5月18日、自宅近くで咲いたスズラン。日高生まれの私は子どもの頃、道端に群生したスズランの可愛らしさと清楚さがとても好きでした。

5月24日、夫の退院を祝うように自宅庭の天文台のそばで、ヒメリンゴの花が満開になりました。「明日のことは思い悩むな」と教えてくれました。



## 津南から動物との出会い2題

吉田 理一

### 玄関先に3匹の子リス

4月から新潟県津南町で畑作農業に専念しています。雪が消えフル回転ですが、過去に経験したことのない新鮮な出会いがいくつかあります。5月6日朝玄関前に3匹のリスが遊んでいてビツクリしました。体長約10cm程の子リスでした、親リスも近くにいると思われますが姿は見えません。リスは動きが早くカメラに収めるのは難しいですが、この子リスは近づいても逃げず、数十枚の写真が撮れました。リスの餌は木の実・果実・キノコ等で津南町には豊富にありますが、天敵のカラス・ヘビ・熊も多く生息しています。



樹上リスは越冬しませんが地上リス（ジリス）は越冬します。外来種も多くこのリスの種は不明です。毎年3メートル超えの豪雪地でどのように暮らしているのか興味は尽きません。

### 農作業中に「熊」

2022年6月1日、午前11時17分、津南町で農作業中に林の中から熊がゆっくり歩いて出てきた。私に気付かないのか、「里熊」で人間に慣れているのか慌てる様子は無い。

急いで家に入り二階に駆け上がり窓を開けて落ち着いて撮影出来た。体長約120cm、熊が去った後、私との距離を実測したら僅か25m。熊は朝方か夕暮れ時に出没すると思っていたので、白昼堂々と出て来るとは驚きです。



## 物故会員の思い出を今のうちに

松本 恒廣

山岳会報「山」606号、1995年11月20日付の会務報告（村木潤次郎会長、9月理事会）には「旧自然保護委員の経験者を中心に緑爽会が生まれ、同好会に加わった。」とある。創立30年目を迎えるのも、そう遠い話ではない。会員名簿の下欄に記されている物故会員を存じ上げている会員も少なくなった。創立メンバーの中心的存在だった渡辺正臣氏、国見利夫氏をはじめ、織内、村山、松丸氏等名誉会員の方々、緑爽会での講話を終えて間もなく、予言通り世を去った私の親友、宮下啓三氏等々の思い出を今のうちにまとめておきたいと思っています。

市ヶ谷の本当のルームですが、16日より使用条件がやや緩和されましたが、まだ集会室で暑気払いとは参りません。念のため利用時間などお知らせいたします。なお、利用には予約が必要です。  
○月・火・木 10時～20時 水・金 13時～20時 土（第1・第3・第5） 10時～18時  
○最大利用人数 集会室 10人、104号室 14人、図書室 2人

**会報送付に関する質問へのご協力をお願い**

会報以外の通知を郵送でお送りしている会員に対して、今回、質問状と返信ハガキを同封していますので、ご回答の程、よろしくお願いたします。それ以外の会員（いつもメールでご連絡させていただいている会員）には月内にメールでお送りしますので、返信をよろしくお願いたします。

**7月暑気払い**

既にお知らせいたしましたように、新しい試みですが、下記の通り暑気払いを開催いたします。出席希望の会員は、7月10日までに下記あてご連絡願います。

日 時：7月16日（土） 12時～14時半

場 所：中華料理「西安（シーアン）」電話：03-5275-5220

JR市ヶ谷駅から日本テレビ通りの坂を上がり、信号のある交差点を右折すると成城石井があります。その隣です。会場は奥の個室ですので「日本山岳会」と伝えてください。

講 話：富澤前代表による「高尾山の魅力」 食事の前にお話しいただきます。

会 費：3000円

申込先：鳥橋祥子

荒井正人

**9月山行 初秋の山「要害山」から富士山を眺める**

山梨県上野原にある戦国時代の城山要害山から尾続山（おづくやま）へ続く初心者向けのコースをゆっくりと歩きます。眺望がすばらしく、要害山山頂、尾続山山頂ほか多くのビューポイントから富士山が望めます。

日時：9月27日（火）

集合：上野原駅前

担当：石塚嘉一、小林敏博

申込など詳細は8月発行の会報でお知らせいたします。



<お詫び>前号の近況報告では、夏原さんの文章にあるように、多くの方から富澤さん、夏原さんへの感謝の言葉がありました。そうしたお言葉をいただきながら、一部の方の近況に書き入れなかったことが判明しました。この場をお借りしてお詫び申し上げます。

--- **編集後記** -----

5月・6月の行事は、ともに天候が不安定な時期で開催が危ぶまれましたが実施できました。ベリーガーデンには遠方から田村さんも参加されました。次の暑気払いは初めての形式です。奮ってご出席のほどお願いたします。会報送付に関する質問は何か方針があつてその裏付けが欲しいということではなく、会員ファーストの視点からのことですのでご理解を。（荒井正人）

先日、蒸し暑い曇り空の下、水量の増えた高尾・日影沢を渡り北東尾根を城山に向かって登りました。城山直下の林道に出会うまでは誰にも会わず、高尾近辺でもこのような静かな登山道があることにびっくりしました。そんな日常的な近況で結構ですので、お気軽に『ようこそ、ルームへ』にご投稿をよろしくお願いたします。（小林敏博）

次号予告 <8月25日発行の主な内容>

さがみこベリーガーデン見学とBBQ報告、暑気払い報告、寄稿・投稿など